
o n e h e a r t ~片思いから~

ゆきほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

one heart～片思いから～

【NZコード】

N2402B

【作者名】

ゆきほ

【あらすじ】

バイト先で知り合った彼との・・・

私は彼との事を小説に書こうと思います

「おはようございます」

と聞き覚えのない声がしてふと見たらあなたがいました。

出会い

は八月中旬バイト先

彼は他の店舗の人で私の店にヘルプに来たらしい。

なんの会話もなくその時は過ぎた。

特になんの感情も抱かなかつた。

夏の終わり また彼と一緒にバイトに入った時この前が嘘のようになぜだか話が盛り上がつた。人見知りの私に彼は優しく話し掛けてくれ、優しく微笑んでくれた。

「高校生？」

「どこの学校？」

「いつからこのバイトやつてんの？」

勿論私だけにそうしてくれるのではない、優しい人なんです。
誰にでも・・・

気がついたら、彼が他の人と仲良く話しているのを見て嫉妬している自分がいた。

シフトが重なつている日は嬉しくて嬉しくてたまらなかつた。

彼には心が開けて色々な話をした。声が聞けるだけで幸せだつた
見るだけで幸せだつた

こんな気持ちになつたのは初めてでいてもたつてもいられなくなる
ほどだつた。

働いてる店舗も違うし彼は大学生で私は高校生 なんの共通点もない、ただ唯一いえるのは彼の通つている大学が私の住んでいる駅にあるということ。それだけ。偶然会うことをどんなに期待していたか・・・

9月になつて入れ代わりは何度かあつたけど彼と一緒に仕事が出来たのは1回だけ。

その日は夜番だつた。

閉店作業がまだ完璧でなかつた私は色々とミスをして泣きそうになつた。

恥ずかしかつた。よく分からぬけど彼に見られたくなつた。でも、彼は嫌な顔ひとつせず丁寧に優しく教えてくれた。

「俺も最初はできなかつたんだよね」長い時間2人だけでバイトをしていて本当に楽しかつたし

この時“好き”と確信した

閉店時間になつてほしくなかつた。

このまま時間が止まればいいのに。

バイトが終わりわかれでから何度も何度も振り返つていた。

それからといふもの彼が気になつて気になつて仕方なかつた。

10月になつて彼に彼女がいる事をバイト先の先輩に聞いて知つた。

ショックだつた。

よくよく考えたら顔もかつてよくて頭も良くて背も高くて優しい彼

に彼女がいないわけがない。

私は彼が好き

でも彼はそんなことは知らない。
友達とも思っていないと思つ。

むしろ他人

そうだよね。会うのも話すのもバイトの時だけ。
気持ちを伝えるべき？

でも彼女がいると知つた今気持ちを伝えようとは思えなかつた。
私は彼女みたいに可愛くないしたかが高校生、
彼の気持ちを自分にむける自信がなかつた。

しばらく彼と会うこともなく私は新しい恋を見つけようと決めた。

彼のことは忘れようつて。彼女がいるんだもん。

諦めるしかない。

私は彼に相応しくない。明らか迷惑

私に彼氏ができた。同じクラスで彼に会う前に少し気になつてた
程度の人。

彼のこと忘れるのにならうといつて思つて付き合ひだした。
すぐに忘れられるだらうつて思つてた。

付き合つて1ヶ月がすぎた頃、彼の大学の文化祭で私は友達とフ
リーマーケットをだした。
久しぶりに彼に会つた。

「久しぶり」

と、彼は手をふつた。

こつちを見て優しく微笑んだ。

こんな些細なことでも嬉しかつた

彼はフリーマーケットに来てくれた。やつぱり彼が好き

見る度にどんどん好きになつてく。

どんどんひかれてく。

ピアスを買つてくれた、彼女について。

あなたにつけてほしかつた・・・

本当は泣きたいぐらい悲しかつたけど、笑つてこまかした。

「ありがとうございます」

つて。

彼にとつて一番田でもいい。

そばにいたい。

その日から4日後久しぶりに彼とバイトが重なつた。

アドレスを聞こうとやつと決心した。

教えてくれないかもしない。

優しい人だから彼女一途なんだと思うから。
他の女とはメールしないかもしない。

不安

アドレスを聞いて断られて氣まずくなるのは嫌だつた。

惨めになるのは嫌だつた。でも彼と連絡をとれれば今より近づける
と思つと、

どうしても聞きたかつた。

彼の携帯がロッカーの上においてあつた。

メールが来たみたいで画面がついた。

彼の待ち受けは

彼女とのチュークリアでした

見たくなかつた。

見なければよかつた。

これでまた彼にアドレスを聞けなくなつた

頭が真つ白になつた。

分かつていただけどなぜかショックで、
彼と話せなかつた。

話したくなかった。せっかく話せるチャンスだつたのに・・・
どうすることもできなかつた。
ますます聞きづらくなつた。

でも諦めきれない

彼氏と付き合つて2カ月になつた。

色んなところに行つた。

でもどこへ行くにも思い出すのはあの彼だつた・・・

別れよう

嫌いな訳ぢやない。少しでも好きつていう気持ちがあつたから、
付き合つたし優しい人だと思う。

こんな私を好きだと黙つてくれて嬉しかつた。私に黙つてくれて
本当にありがとう。

私もあなたに精一杯黙つて思つた。
あなただけを見よつと。

でも無理でした、

ごめんなさい・・・

私はやっぱり彼が好きなんです。
忘れられないんです。

諦めきれない。

こんな気持ちのまま付き合つて黙つてはいけない。
ズルイよね。

本当にごめんね。

でもこの2カ月ホントに楽しかつた。

こうして彼氏と別れた。全然会つてなくとも連絡とつてなくとも
こんなに好きでいられる。

彼しか見れない。

迷惑だつて分かつてゐる。

だけど

気持ちを伝えたい

彼がバイトを辞めるつて話を耳にした。

いつ辞めるかは分からない。

本當かどうかは分からない。

焦つた、

辞める前に連絡先を聞きたい。

いつものようにバイト先でシフトを確認してたら・・・

彼の名前が書いてある。

“まだ辞めてないんだあ”つてすごい安心した。5日後の水曜日

だつた 彼に会いに店に行つた。

彼はいた。

勇気を出してアドレスを聞いたら、意外にも彼は

「いいよ」

と愛想よく言って紙に書いてくれた。

嬉しくて仕方なかつた。いてもたつてもいられない。

しばらく話した

彼は年が明けたら辞めるらしい。

大学のキャンパスが変わるから引っ越すんだつて。都心にね。

もう会えなくなると思うと涙かでるぐらい寂しくなつた。辞めてほ

しくない。

会えなくなるのは絶対嫌。

次の日さつそく彼にメールを送つた。返事は悲しいぐらいあつけない。一言だけ・・・どんなに長い文を送つても返つてくるのは一
行。

それでも嬉しかつた。

2日に1回のペースでメールした。

電話もかけたけど電話は出てくれなかつた。

彼に会いたい

学校の帰り彼のバイト先に寄つてみたり大学の中を通つて帰つたり
したけど

神様は意地悪だね。

彼に合わせてはくれなかつた。

3週間がたち彼が彼女と手をつないで歩いてるのを見た。

幸せそうな彼・・・

私が彼女だつたらどんなにいいか。

彼女が羨ましい声をかけられなかつた。

あんなに楽しそうな彼を見たことなかつた。

私はただ見てるだけ?

なにも変わらない

このままだと彼は辞めて一生会えなくなる

このままで終わりたくない

次の日の夜、店をのぞいたら彼がいたので終わるまで待つてること
にした。

寒かつた。

12月の寒い中1人で階段に座つて彼をひたすら待つていてた。

凍えそなぐらい寒かつた。

11時半バイトを終えた彼が私の前を通つた。私は彼の名前を叫
んだ 彼はビックリして振り返る。

いつたん場所を移動して、彼の家につれてつてくれた。彼の香り
が漂つっていた。

「飲みな」

温かいミルクを差し出す彼。

震えながら

「ありがとうございます」

私は涙が出てきた。

こんな事して馬鹿みたい

「一体どうしたの?」

彼が聞く。

気持ちを伝えた

泣きながら必死に

彼は黙っていた。困っていた。

私はその場にいられなくなり

「12月24日大学の噴水前で待つてます」と一言言つて出ていった。

彼のアドレスを消した

番号も消した

気持ちを伝えられた。

よかつた。

可能性はないと思つたけど24日ずっと待つてみよう。

ここまでが私の書いた小説です。

これを彼に送った。59分

「ごめん」

きた

彼は走って

息をきらして

こっちに向かつてゐる

嬉しかった。断りにきたのに嬉しかった。

会えてよかつた。

「ありがとう」

つて言つて帰ろうとした時 告白された

夢？ 12月24日、彼に伝えた例の場所に私はいた。

来るはずもない彼をずっと待つていた。

あんな小説を彼に送つてどうなるのか・・・

自分でも自分がした事がよく分からぬ。

ただ記録として、

残しとけばよかつたものを・・・

ずっと座つていた。

辺りは暗くなつてきてカツプル達が私の前を横切る。惨めだ。

11時46分・・・そろそろ帰ろうか。

いや、後少しだから待とう。

11時59分・・・帰ろう。立ち上がった瞬間後ろから足音が・・・

「えつ、どうして」

彼は息をきらしながら私に向かつて走つてきた。

「す、好きだ。好きなんだ」

真つ赤な顔をして彼は言つ。

戸惑つた。

涙が止まらなかつた。

これほど嬉しいでない事はない。

12月24日 忘れられない日

12月24日 最高の日

彼と付き合つたものの実感がわからなかつた。
幸せすぎて恐かつた。

この幸せがいつか壊れるんじゃなかつて。
彼とは色んな所に行つた。毎日一緒にいた。
会わない日は1日もなかつた。

ディズニーランドに水族館、遊園地、映画、スケート…彼とならどこへ行つても楽しい。

彼と一緒にならなにをしても楽しい。

年末も彼の家で一緒に過ごした。

2人でカウントダウン

3、2、1…

除夜の鐘は家の中についても聞こえた。

あけましておめでとう 今年もずっと一緒にいられますように。

「海が見たいの」

私は言った。

付き合つて1ヶ月たつた頃彼の車で海に行つた。

車で1時間ぐらいだつたかな。

夜の海は静かだつた。

聞こえるのは波の音だけ

誰も人はいない。私たちは2人浜辺に座つていた。

「目つぶつて」

私の手を優しく握る彼

「手かして」

そう言い私の左手の薬指に指輪をはめた。彼からのプレゼント
一生大切にする

帰りは夜遅くなつた。

私が夜の海がみたいなんて言つたから。

車に乗つて帰つていた時 白い光が私たちを包んだ。

記憶がとんだ。

リリはなぜ?

病院? どうして?

私はどうしてここにいるの?

彼と車に乗つてたはず

彼は？彼はどう？

「先生」

と看護婦さんがあわてて先生を呼びに行っていた。

「よかつた」 なにが？

私はビビり事故にあつたらしく。彼は・・・19歳といつもで・

・ どうして彼なの？

私は泣き叫んだ。声が枯れるほど泣き叫んだ。

「やだよ、いかないでよ。私を1人にしないで」
現実を受け止められなかつた。

受け止めたくなかった。

今みなさんが読んでいるこの小説です。

彼と過ごした1ヶ月はかけがえのない宝物。

一生忘れない。

そして彼を今でも愛してる。私の薬指は彼からもらった大切な指輪
が今も光っている。これからもずっと . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2402b/>

one heart ~片思いから~

2010年12月13日21時35分発行